

『歸省』 狄仁傑

歸省 狄仁傑

歸省 狄仁傑

幾度天涯望白雲

幾度か天涯白雲を望む

今朝歸省見雙親

今朝歸省して雙親に見ゆ

春秋雖富朱顏在

春秋富みて朱顔在りと雖も

歲月無憑白髮新

歲月憑る無くして白髮新たなり

美味調羹呈玉筍

美味羹を調して玉筍を呈し

佳餚入饌鱠冰鱗

佳餚饌に入つて冰鱣を鱠にす

人生百行無如孝

人生百行孝に如くは無し

此志眷眷慕古人

此の志眷眷として古人を慕う

〔作者について〕

(西暦六三〇年〜七〇〇年) 初唐、山西省太原の人。字を懷英と言う。則天武后のとき宰相(注一)となり、直諫(注二)を敢えて行い、かえつて武后の信任あつく国老(注三)として尊敬された。嗣聖十七年没。年七十。
(注一) 天子をたすけて政治を行う最高官
(注二) あからさまにずけずけ諫める

(注三) ここでは則天武后を輔ける大臣

【意解と語意】

首 聯

(意解) 何度となく遠い白雲の彼方にある故郷を望みながら暮らしてきたが、やっと今朝無事に郷に帰り、両親の安否を確かめるべく一人にお会いすることができた。

(語意) 歸省Ⅱ「省」には①詳しく見る「省察」②かえりみる「反省」③人の安否を夕方に尋ねる「帰省」④はぶく「省略」などがありここではもちろん③である。しかし今ではそれが薄れ単に故郷に帰ることをいうが唐時代の詩だから原意をとりたい。天涯Ⅱ空のはて、きわめて遠いところ、見雙親Ⅱ両親に会うことだから「雙親をみる」とも読めるが、せっかく古典には「まみゆ」という尊敬表現があるのでこちらで読みたい。

頷 聯

(意解) (幸いにも) お元氣そうで顔の色つやもよい、しかし歲月には逆らえず白髪が見え始めている。

(語意) 春秋(に) 富むⅡ「まだ若い・先がある」という慣用表現。憑Ⅱよりかかる。ここでは歲月を経る。

頸 聯

(意解) 私は(呉の孟宗がその母にしてさしあげたように)上等な筍を用いておいしい羹を調べ、また(晋の王祥のように)氷下の鯉をなますにして良い肴としてお膳立てした。

(語意) 調羹あじわ 羹を調理する。玉筍 美しいたけのこ。上等なたけのこ。殺ころ 肴。酒のつまみ。入饌 膳の用意をする。氷鱗 氷の下の鯉。

この対句の二句は孝行者として名高い二人の逸話を取り込んで作者の孝養心を表現したもので、そのことは教本に略述されている。また二句とも動作が前後している。五句を直訳すると「おいしい羹を調理して上等な筍を用意した」となり、おかしい。解釈としては意解のようであればならない。蛇足ながら上等な筍の採れる竹を「孟宗竹」と呼ぶのはこの人物に因るものである。六句も同様である。直訳すると「よい肴をお膳立てして寒中の鯉をなますにする」である。上下倒置することで印象的表現をしたのであろう。

尾 聯

(意解) 人生にはいろいろ良い行があるが、親に孝養を尽くすことに勝るものはないのであって、私も古の孝子を厚く思いつつ見習っていききたいものである。

(語意) 眷眷 ねんごろに厚く思う。古人 教本には孟宗・王祥を指すとあるが必ずしも二人に限らなくても良い。

【鑑賞】

律詩の平仄に適合しないので正格ではない。また「白」「無」「人」のこぼの重複も模範的ではない。

仁傑は当時親孝行ものとして有名であったので、それを称えて後人が作ったのではないかという詩の評を読んだことがある。しかし作者が誰であれ親を大切にすることは尊いことである。詩を読んだものが感動すればそれはそれで良い詩なので、しっかりと吟じてみたい。宮崎東明先生がご愛好された詩なので本会に採用されたと思われる。

【参考】

教本にもあるように中国には「二十四孝」と格付けされている歴代二十四人の孝子が伝えられている。

これは元代の郭居敬の編集した書物にあるもので、仁傑の時代からは何百年も新しい。孟宗・王祥以外で目にした人をあげてみると、舜(伝説時代の帝王)・閔子騫(春秋時代、孔子の弟子)・曾参(孔子の弟子)・黄庭堅(宋代の詩人)など。それぞれ、にわかには信じられない逸話がついている。例えば閔子騫。彼は幼くして母を失い、父は再婚して異母弟二人ができた。継母は自分の子ばかり愛して

子鶯には冷たかった。冬になると二人には綿入れを与えたが、子鶯には蘆の穂を用いた着物でがまんさせられた。子鶯が寒さに震えているのを見て、父が継母と離婚すると言うと、子鶯は「母上が出ていかれると三人の子供は凍えてしまいます。私一人が寒さに耐えさえすれば、弟は暖かい冬がすごせます。だからどうか離縁はなさらないでください」と懇願した。

継母はその情に感涙し、以後は三人とも分け隔てなくかわいがったという。

【所感】

「親に孝行する」とは子が親を思い、重んずる心情から自然に現れる人の行為である。「孝行をしたい時分には親は無し」と言われるが、この孝行心は時代を超え国を越えて人に共通するものであろう。日本でもこの情を主題にした漢詩や和歌・俳句はたくさん残されている。教本を見る

と廣瀬淡窓作「思親」、細井平洲作「夢親」、松口月城作「石童丸」及び「母」、頼山陽作「侍輿歌」などである。ここで本会教本で馴染みの詩を挙げてみたい。

母を送る路上の短歌

頼山陽

東風とうふうに母ははを迎むかえて来きたり
北風ほくふうに母ははを送おくりて還かえる
来きたる時ときは芳菲ほうひの路みち
忽たちち霜雪そうせつの寒ふせと為なる
輿こしを聞きいて即すなはち足あしを裏つみ
輿こしに侍まして足あし槃はん跚さんたり
児この足あしの疲つかるるを言いわず
唯母ただははの輿こしの安やすきを計はかる

(以下略)

曼珠沙華

中村汀女

曼珠沙華 抱くほどとれど 母恋し
(繰り返し)
抱くほどとれど母恋し

